

千葉正健さんを偲ぶ

正健

「千葉正健さんを偲ぶ会」開催に当って

本日は、「千葉正健さんを偲ぶ会」にご参加いただき有り難うございます。呼びかけ人、事務局を代表して御礼申し上げます。

生前の千葉さんを知っている方以外にも本日は、直接、千葉さんを知っておられない方も参加されています。千葉さんを偲ぶにあたって、そうした方のためにも、また、良くご存知でも永い間の記憶の風化は避けられないわけですから、参考の為に本日は短い文章だけを集めて、小冊子を組んでみました。

パラパラとページをめくるだけでも千葉さんの個性が香るような文章ばかりです。千葉さんが、反スターリン主義革命戦争派だということは「獄中通信 NO1」末尾に明記してあります。同時に、中央集権党主義者でなかったことも様々な文章から明らかです。中学生時代からNHK ラジオ音楽番組にレギュラーで出るような音楽家であった事も、プロバンド活動を行った事実から明らかです。

18歳になって、革命の道に生きる決意の文章ノートも残されています。その決意の下、精進を重ねて生きたのだという事ははっきりしています。第二次ブンド再建こそはその成果でした。しかし、構想の挫折としてしか実現できませんでした。ブンドの外にあって、ブンドを心配しながら「ヴァンドックス」、「ギャンプラズ」、「スパルタクスブンド」活動をする心境はどのようなものでしたでしょう。

結果、72年の銃打ち銃闘争に決起せざるを得ませんでした。

個性あふれる短文を手がかりに偲ぶ為のご歓談をしていただければ幸いです。

この文集の表題は「精進」としてあります。これは、千葉さんが自宅に幼くして死別した母上の写真とともに、父上の形見として掲額していた三船久蔵講道館柔道10段の揮毫です。心に常に「精進」を言い聞かせていたのだろう、と考えて冊子の表題にしてみました。

(文責 草丘 望)

西暦 2011 年 10 月 10 日

「千葉正健さんを偲ぶ会」事務局  
蔵田計成、高橋進、守健司、草丘望

# 千葉正健さんを偲ぶ会パンフレット『精進』

## 目次

われわれの運動の出発に際して	2
統一戦線戦術とは何か—理論研究のために	3
獄中からのアピール	5
赤軍の同志たちへ	11
血よりはじめて詩にいたる 他三篇	17
『さらぎ徳二著作集』第一巻 解説	22
ブンドと仏徳二	33
理論の前に心がある 経験知というものについての特別な感性——〔書評〕市田良彦、石井暎禧著『聞書きくブント』 一代』	34

「千葉正健さんを偲ぶ会」事務局

2011年10月10日

## われわれの運動の出發に際して

我々の運動と組織は、働く者の解放を通じて全人類の解放にまで至る永続的な革命運動を推進することを目的とした、共産主義者と社会主義者と民主主義者を包括する生活共同体である。したがって、たんなる職業政治家や職業革命家だけの集団ではなく、働く者の陣営に立脚して行動する総ての人々を統一することを任務とする集団である。

政党政治とは、ブルジョアジーの政治形態である。したがって解放運動を政党運動の枠内にとどめようとする一切の試みは——たとえ、その政党が「前衛党」を名乗っていても——反動的である。アルジェリア、キューバ、ラオス、これらの国々の解放運動において民衆の力を組織したものは、いずれも「政党」とは呼びえないものであった。歴史上、最も優れた階級政党であったポリシエビキ党ですら、権力獲得後は次第に反動的な役割を果たすものへと変質していったのである。我々はこのような現象は決して偶然的ではないと考える。ブルジョア的方法の政党政治によって、プロレタリア革命を遂行することは不可能ではないが、それはあくまで例外である。共産主義者の党を「政党」とか「前衛党」としてしか考えず、プロレタリア国際主義やインタナショナルを政党や分派の連合としてしか考えない連中は、即刻、革命運動から身を退くべきであろう。政党政治の時代は、とうの昔にその使命を終えたのである。

われわれ社会主義青年運動（S.M.）は、政党運動を目的とするものではなく、まして分派運動をすることなどは問題外の外である。我々は政党政治の克服なしには、日本革命の成功はありえないという信念

は克服されるべきであろう。

自由な生活を求め、革命的情熱をもった諸個人を基礎とした、我々の組織の内部においては、上級機関と下級機関という奇妙な対立物は存在しない。また、個人は組織に服従し、下級は上級に従い、少数は多数に従い、決定に対しては無条件に従う、というような中世時代の組織論とも無縁である。自律した人間の集団が強大な力を發揮するのは、自由な討論によって意志と行動の統一がもたらされた場合のみであって、他人によって強制された力はゼロであろう。強制された死の力と自由の生命力とどちらが強いかやってみようではないか。共産主義運動とは、自由を求め、自由を実現する運動であり、この世界で自由の力ほど強いものはほかにない。

我々は公認共産党が投げ捨てた自由の旗を拾い上げ、我々の運動の先頭に自由の旗を高く掲げて強く生きぬくことを、ここに誓う。

一九六一年九月一三日

をもとに運動を推進する。我々が将来において「日本共産主義者党」を名乗ろうとも、それは政党ではないであろう。

現代に於いて、共産主義者と社会主義者が資本主義打倒の革命に当面していることは言うまでもない。しかし、一部の独占資本が広範な民衆の自由と民主主義を抑圧し、ますます制限している現在の諸条件のもとでは古典的な民主主義の要求でさえも、資本主義を打倒することなしには実現されえない。したがって、現代の革命は社会主義、共産主義への社会革命の要求からも、また自由と民主主義への政治革命の要求からも、ともに資本独裁を粉砕する方向へ進まずにはおかない。したがって我々の一切の路線は、社会主義革命と民主主義革命の戦略的同時性の認識を基礎としている。もちろん、現実においては戦略的同時性はただちに戦術的同時性を意味するものではない。だがしかし、民主主義革命と社会主義革命が戦術的に前後した場合においても、それは戦略的同時性の発現形態にはかならない。そして、戦術的次元においても、民主主義革命と社会主義革命が時間的一致を示すことが原理的に正当であることは言うまでもない。

共産主義とは、たんなる経済体制や政治的流派の問題でなく、人間のすべてを包括する生活の問題である。共産主義者として生きるということとは、たんに一つの理想を持ち続けることではなく、与えられたいかなる時、いかなる場所においても、人間生活の最善の状態を実現すべく活動することである。共産主義は人間の歴史と同じほど古く、古代から中世の暗黒時代を経て近代、現代へと継承されてきたところの、人間の理想社会像を指向する思想ないしは現実の運動であって、これを社会民主主義との見地からしか問題にしないような皮相な見解

## 統一戦線戦術とは何か—理論研究のために

革命理論——それは社会変革を科学として捉えた時、変革の担い手の一つの階級に結びつけた時、マルクス・エンゲルスがプロレタリアートを発見した時に誕生した。ルソーの時代には社会の未来像と現実社会の矛盾とは直接的に結びつけられていた。（無媒介的に）革命が科学的法則としてつかみとられるには支配者と被支配者との関係が数字で表されるような社会が前提とされたのである。そして、そのものを理論と実践を媒介するものとして規定したのはルカチチであるが、革命的組織と革命的実践との間には戦術理論という媒介物が存在するのではないだろうか？ 単に理論と実践との間に組織というものがあるが媒介物として存在するというだけではなく、組織と実践の間には理論が媒介物としてあり、組織と理論の間には実践が媒介物として存在するということも言えるのではないだろうか？ しかし今はこの問題から離れよう。

### 一

統一戦線ということ自体が二つの前提の上に成り立っている。まず各々性格を異にして方針の上でも一定の対立点を持った二つ以上の組織が存在するということ。このような複数の組織がなければ統一戦線という問題は提起されない。そうしてもう一つのこととは、このような合体できない複数の組織が一定の目的に於いては共通の利害関係を持ち、その共通の利害関係のために一定の盟約を結ぶことができるということ。この二つの前提があった時はじめて統一戦線という問題が提

起される。共産主義者、社会民主主義者、民主社会主義者、民族主義者、キリスト教信者、小ブルジョワジーというように性格を異にした者が岸内閣に反対するという点に関しては意見が一致することがあるだろう。この時、岸内閣に反対する者すべての力を結集して反岸の統一戦線を張ろう、という問題が提起される。

## 二

この統一戦線はどのようなものでなければならぬであろうか。岸内閣に反対するという一定の目的については一致した、しかし岸内閣を打ち倒す手段や打ち倒した後の措置については各々の間に一定の矛盾が存在する。当面の特定の目的について、共通の利害関係を持ちながら、その目的を達成する手段が異なるとき統一戦線はどのように闘わなければならないのか。保証されなければならない必須条件は、各々方針を異にする別の組織がそれぞれ最大限の力量を発揮できるようにすることである。この点で少しでも闘争を阻害するような妥協を行ってはならない。そのためには組織上の独立性を保持し、方針の点で他と妥協せず、そして共通の敵に対して何日に誰と誰がどのような方法で打つのか、ということについて意志を通じ合い、あとは各自が自分の方針に基づいて最大限の力を発揮することである。つまり統一戦線とは同じ目的を持ち、それに対して異なる方針を持つ者達が、その共通の敵を倒すために各々の力を有効に結集するための戦術津であった、それは同一行動となる時もあるが、統一戦線＝画一行動と考えることは誤りである。各々異なった行動や表現を最も有効に敵の弱点に向けて集中することに統一戦線戦術の本質があるのだ。

蒋介石のクーデターによってスターリンの与えた武器は多くの共産党員を殺した。中国第三革命はどうであったか。反日本帝国主義という一定の目的に於いて国共両党はまたも統一戦線を張ったが、中共は労働者政党としての独立性を保ち、軍隊も八路軍、新四軍という別の組織と別の方針を持って闘った。その結果は第二革命とは逆となった。一九一七年の二月から十月の間に起きたコルニロフの反革命に対するボルシェヴィキの態度と同じ教訓を我々に残している。統一戦線の問題については一九一七年に発せられたボルシェヴィキの次のスローガンが今でも我々に統一戦線についての正しい態度を明確に教えている。

別個の進み 一緒に討て！

一九六〇年五月五日

『若きボリシェヴィキ』第二号（一九六〇年五月七日発行）から

## 三

羽田闘争に於いてはどうであったか？ 各組織の条件によって行動の形態は異なってくる。一月一六日岸首相の渡米に反対することでは意見の一致があつたがその手段は異なるのであるから、各々の特殊な条件に基づいて共産主義者同盟と全学連は飛行場の中でスクラムを組み、社会党と東京地評は空港沿道に大衆動員し、ジャーナリストや文化人は抗議声明を発し、共産党と総評は飛行機出発時刻より八時間も遅れて、羽田とは方向違いの方で抗議集会を開くというように各々の力を最大限に発揮させなければならない。ところが全部が同一の行動形態をとることが統一戦線だと考えると国民会議の行動は誰でも参加できなければならないような行動ということになり、したがって参加組織のうち最も遅れた部分の方針に全員が歩調を合わせることになり、かくして共産党の方針に決まるのである。そうではなくて、進んだ部分や遅れた部分、あるいは闘う条件にある部分とない部分の各々それぞれがいかに最大限の力を発揮できるようにするか、ということこそが統一戦線の核心なのだ。あくまでも組織の独立性を保持し、各々の方針に基づいて最大限の力を発揮し、そしてその別々の行動を一点に結びつけるという三つの原則を守らなくては正しい統一戦線はあり得ない。

中国の第二革命に於いて中共はスターリンのコミンテルンの命令によって、共産党員としての独自行動をしないということを条件にして国民党に入党していった。そしてまたスターリンは中共にはなく国民党に武器を与えた。国共両党の一定の共通の目的が達せられた時、

## 獄中からのアピール

支援委員会の結成のために尽力してくれている友人の皆さん。私の行動に心からの連帯の支持、激励を寄せて下さった同志の皆さん。すでに二月一五日から一〇〇日以上がすぎりました。この一〇〇日あまりの日々、それはあまりにも変化と問題に満ち満ちた歴史的な意味ある期間であつたと思います。浅間山荘の銃撃戦から肅清事件のブルジョワ的暴露、更に、四・二八、五・一五の沖繩闘争からテルアビブの決死隊攻撃まで、これらの事件は日本の階級闘争、革命運動をそれまでとは全く異なった段階へと明瞭と押し上げました。私はこれらの期間、私自身の事件による批判的分析とともに、これらの事件について獄中という限られた条件の中でいろいろと考えさせられました。いま、司法当局は、私に房内自由筆記を与えもせず、まだ事件から半年もたつていず、武器の入手経路、改造過程に関する捜査の継続中であるにもかかわらず、早くも第一回公判を強行しようとしています。私は、私の裁判闘争を支援して下さる勇氣ある同志、友人の皆さんに、私の現在の決意と心境を率直に語ることによって獄中からのアピールに代えたいと思います。

同志、友人の皆さん。私の行動、私の闘いとは何だったのでしょうか。私の行動に支持を寄せ、私の裁判闘争に連帯するということは、いかなる意味を持つものなのでしょうか。私は銃打銃によって警察官を狙撃しました。そして現行犯人として逮捕されました。自己の行動が基本的には未完成で、しかも、その行動を即時現行的には継続しえ

ないという状況のもとで、その全体的意義を語り、かつ弁明するということとはそれほど容易なことではありません。私の行動が基本的な目標を達した段階でのコメントということには何の困難もありませんでした。しかし目的を達成しなかった者の大言壮語というものは奇妙なものであります。したがって私は自分の行動の全計画については何も言うことはないと思っております。しかしながら、いくつかの点については是非とも明らかにする必要がありますと思います。

私の行動が警察官の拳銃を奪取する目的によるものであることは新聞で報じられたとおりであります。では「警察官からの拳銃の奪取」とは何なのでしょう。既に七〇年の十二月十八日には上赤塚の交番が柴野、渡辺、佐藤の三人の反米愛国戦士によつて襲われており、また七一年八月の赤衛軍の事件も武器の奪取を目的とするものであります。これから、このような行動は益々増加するでありましょう。これらは全てゲリラ戦争の最初の行動であります。キューバでカストロ軍が山岳ゲリラを展開した時、多くの志願兵が登山しましたが、敵を襲つて武器を持ってきた者だけがゲリラ戦士として受け入れられ、あとは全部追ひ返されました。武器を持たない人民の政治闘争から、革命的なゲリラ戦、遊撃戦が登場する場合にどこでもそうでありました。そのようにしなければ、戦士は形成されず、スパイの潜入は防げず、軍隊は組織されません。これは連合赤軍の内部崩壊によつて完全に日本でも逆証明されたのです。また、ゲリラ戦の指導者も例外ではありません。今までの合法的な政治闘争の指導幹部をゲリラの指導者に横すべりさせることは絶対にできません。ゲリラの指導者もまた、他の

般通行人の流れダマによる被害が及ばないような条件を確信した上での限定した行動であつたことは、私の弁護のためではなく、革命運動の弁護のためにはつきりさせておかなければなりません。私は強盗殺人未遂（刑法二四〇条後段）という罪名にいささかも恐れるところはありません。今後、このような罪名は益々増加するでしょう。私の目的がテロリズムであるならば、行動の政治上の宣伝ということを考慮して、大衆デモンストレーションの当口に合わせる事ができたでしょう。しかしながら、私の襲う対象は武装警官でなければなりません。政治的なスケジュールに合わせることもよりも武器奪取の達成が何よりも優先されなければならなかったのです。テロリズムにはテロリズムとしての別の使命と有効性があります。現在の任務は何よりもゲリラの創出と定着であります。

第三に、なぜ私は単独でも行動したのでしょうか。この点で、現在、私は一部の諸君から批判を受けています。しかし、私は、今でも自分の行動が誤つていたとは考えません。もちろん、三人ならばなお良かったでしょうし、そうであれば私は逮捕されなかったでしょう。また行動の目的も達成されていたでしょう。三人寄れば無手でもやれる、私はそう思っております。しかしながらマリゲラも言っているように、誰にも革命運動の立上るのを抑える権利はありません。革命とは誰がやっても良いものであり、何人でも始めても良いのであります。ゲリラを開始する思想にとつてこのことは重要であります。なぜならば、新左翼の党派の内では、ゲリラに着手しない党派の方が圧倒的に多いからであります。このような党派にとつて「党」とか「蜂起」とかい

兵士に先立つて敵から武器を奪取し、自分が提起した軍事方針を自らの行動によつて実践検証してこそ、指導者としての地位を承認され、また、他の兵士に命を捨ててべき行動の指令を発することができのです。非軍事的な生活をしている政治局がゲリラを指導することはできないという中国革命とキューバ革命の共通の教訓は、このようなそのもの出発点たる単純なことがらにわたつてまで貫徹されていることが理解されなければなりません。七年以上の長期実刑を恐れている党派が、いくら緻密な理論を求めても、いつまでたつても軍事ははじまらないでしょう。まず、武器を取つてこなければゲリラについての発言権はなく、軍事を語ることもできません。ゲリラが開始された時点でオルグ活動というものは、言葉によるものではなく、自分が取つてきた武器を相手に貸し、その相手にも武器を取つてこさせるといふ形でしか成り立ちえないものです。そうでなければ、どうして命を賭けたゲリラ戦士としての信頼と連帯が勝ち取れるでしょうか。「隊内生活の共産主義化」——これは典型的な観念論でありキリスト教徒の方法であります。我々もつと中国、キューバ等の諸外国の先輩の経歴を謙虚に学ばなければなりません。

第二に私の行動は決してテロリズムを意味するものではありませんでした。テロリズムであつたならば下級公務員が第一の対象とされることは通常ありえないでしょう。ゲリラの戦術は上級の警察官と下級の警察官の分断こそ策するべきであります。浅間山荘の五人の兵士が上級の指揮者だけを殺害したということは決して偶然ではありません。私の場合には、警察官の右肩の射撃による腕力の制圧ならびに革命的な言葉でさえもゲリラ主義に反対する言葉として前面に押し出されております。代々木共産党が大衆的実力闘争に反対しているのと同じような現象が、新左翼諸党派のゲリラに対する態度の中にも生じております。このような状況では、私のようにたった一人でも立ち上るといふことは何ほどかの意味を持ちうると思えます。少なくともゲリラに着手していない諸君が私のことを批判する権利はないと思います。人数を揃えて計画的にも完全さを期して遂行すべきことはもちろんありますが、そのことと、すでに決行された行動を否定することは全く別のことであろうと思えます。

第四に、たとえ武器の奪取に成功しなかった場合でも、私が武器を独占している権力に向けて弾丸を放つたという事実には変わりありません。当時、七一年の二月一七日以来、六・一七朝霞、九・一六成田、一〇・一一月闘争、十二月爆弾闘争と革命運動は前進していましたが、なぜか銃声は発せられなかったのであります。現在では、決して、これが偶然ではなかったことが明らかにされています。十二・一八集会における赤軍派の中央軍アピールは実に痛切な状況を語っています。このような中で沖繩闘争の七二年を迎え、また、大学の授業料値上げ反対闘争は空前の規模が予想され、是非とも、たとえ一発でも銃声を発することは緊急なものとなつていました。誰かが命をかけて実行すれば、もつと大量の武器を持ち、人員を揃えた諸君が決起することは火を見るより明らかであつたからです。私が単発銃で単独でやったということは、この意味においてしかありません。そうでなければ単なる無謀な自殺行為と思われたでしょう。二・一七以来、一年にもなる

のに一発の銃声も発せられていないのは、ただ主体的理由によるものということは、自分自身に覚悟のできている者にとつては直観されることでした。現在では日共革命左派の同志たちの書簡により、この期間、本格的な遊撃戦が遂行されていないことに対する疑惑が投げかけられていたことが明らかになっています。私は一発の弾丸を発するだけで自己の生命を終えたとしても、それでもつて良しとする決意があつたればこそ、あのような行動をとりえたのでした。

第五に、私の行動は、自分が銃声を発することに於いて「赤軍」に参加するという明瞭な意識のもとに遂行されたものであります。七月十五日に結成された「赤軍」はそれまでの「党の軍隊」から「人民の赤軍」へと新たな地平を切り拓いたものであり、我々は、断じてこの地平から一歩たりとも身を引いてはなりません。また、この「赤軍」の結成によって、いわゆる党としての赤軍派との意見の相異という理由によって「赤軍」に参加することをネグレクトする根拠を完全に無意味とする規定が与えられたものと言わなければなりません。革命的左翼が多くのセクトに分裂している現在、その中のひとつを選んで所屬したり、それらの党派とは別個の党派を形成する場合には、非常にこみいった自己規定がなされた上での自己の立場を闡明にしなければなりません。しかし、日本の歴史的闘争が生み出した「人民の軍隊」に志願するのを誰が遠慮することがありますでしょうか。私が「赤軍」へ参加を意志表示したからといって、誰に批判されることがあるでしょうか。私は現在、逮捕され獄中に居る身であつて、兵士として何の役に立つものでもありません。しかし「肅清」事件以来、我々は困難な

ならば一点の曇りもなく理解されたであります。しかし、それが、二月十五日の行動の説明として持ち出される場合には単なる「弁解」にすぎないものになつてしまつて私には知っています。私は、私と同じ結論と決意に達した諸君が必ず出現し、次の行動を担つてくれることを固く確信していますが、私の意見は、現在の革命戦士を中心にすすめられている革命党建設のための討論の中へ積極的に提起していきたくと考えています。何から始めて何に至るのかという問題。革命運動を構成する三つの勢力である武装勢力、半武装勢力、大衆的政治勢力の積極的な協力関係を日本の具体的な党派状況に即して正確に判断し、正しい統一戦線を確立する問題。党が軍の行動を抑制せず、軍が党を危険に陥れず、組織破防法体制のもとにおける「党軍一体」と「党軍分離」を共に実現する組織形態の問題。複数党派と指令系統別軍編成のもとでの赤軍の統一した政治基準の問題。革命的マルクス主義の党として、資本主義観から党組織論を経て革命的戦術の体系に至る一貫した方法に基づく立脚点を確立する問題。あれやこれやの経験主義的な民族共産主義の革命路線ではなく、帝国主義本国の革命と「第三世界」の革命とを、あくまで資本論から出発して統一して把握するマルクス主義としての革命理論を獲得する問題。そして最後に革命的武装闘争における「殺人」をめぐるブルジョワ思想との徹底した対決—これらの諸問題をめぐって、現在の討論が深められていくことは必至であると思われまふ。総括の問題も決してここ二、三年の問題をめぐるものとしては終わらないでしょう。既に、新左翼運動の全過程全体をめぐるものとして「総括」は開始されています。一切の方針提起、一切の計画はこれらの討論に参加し、解決し

状況に追い込まれており「全滅」キャンペーンさえ張られています。また、獄外の諸グループにも種々な動揺が生じているとも聞いています。したがって、手足の活動をもつて戦線に登場できないとはいへ、このような後退局面において、また、一定の不評判のもとにおいて、あえて「赤軍」への参加を表明し、「赤軍」のための文筆活動に多少なりとも尽力をすることは意味のあることでもあり、私の義務でもあると考えます。革命運動に年齢はありません。バクーニンは七〇才を越えてからも武装蜂起の第一線に立っています。マリゲラは五〇代もなかばを過ぎてから都市ゲリラを開始し、一年あまりで戦死しております。ようやく三十二才になつたばかりの私が、ゲリラの第一歩について語るのを何を恥じることがありますでしょうか。一切の俗物的通念は無用であります。私は、獄中の同志たちはもとより、私を支援してくれる諸兄姉、また私の行動に批判的見解を持つ諸君をも含めて、今後の討論を深めることに微力を尽したいと思ひます。

第六に、私の行動は、それが外見上どのように見えようとも、最終的に単独者の行動として終るような、突発的な、偶然的な、イチカバチカといったような、無計画な、持続性のない、組織的な展望のない、そのようなものとして遂行されたものではありませんでした。長い間の思考と準備によつて結論づけられた強固な確信のもとに実行されたものであり、当然のことながら、それは「党形成の方法」までも含めた—そして何よりも、私自身の過去の実践の総括を踏まえた—首尾一貫した方法論と計画のもとに提起された行動であります。それは、行動によつて達成された成果の上立つて公表された宣伝文書の中でていくことを通じてしか有効には実を結ばないでしょう。私が、二月十五日の行動を実行した者としての自己規定においても、これらの討論に参加しなければならぬ所以であります。

以上、私は、私自身が銃打銃という極めてプロレタリア的な武器によつて武装警察官を狙撃し、拳銃を奪取せんとした事件についての、いくつかのことがらを、語つたわけですが、もはや二月十五日の行動に密着した発言はあまり生産的な討論とは言えません。状況はあまりにも急激に変わつてしまいました。事態はまさに「七二年」にふさわしい勢いで前進しています。テルアビブでの三戦士の決死的行動は何と英雄的で偉大な壮挙でしょうか。つい先日までは、ブルジョワ新聞は「赤軍は壊滅した」と語っていたのでした。ところが今度の行動を通じて「数百人の革命戦線」「数十人の軍事組織」の存在を治安関係者自らが明らかにしなければならなくなつたばかりではなく、アラブでは「日本人ゲリラが数十人も訓練されて」おり、日本国内にもPFLPの秘密基地があり、西ドイツでは日本の赤軍派を上まわるほどの実績を上げている「赤軍派」が活躍して米軍司令部すら爆破され、また今や日本でも公安部にマークされていないような活動家までが続々とゲリラに身を投じている事実を人民の前に公表せざるをえず、更に「世界赤軍」の理念が全く現実化されていることをも白日のもとに曝したのでした。革命的意図による行動はこのようなものでなければなりません。今回の作戦はその最良の見本であり、模範であります。私は今、これと比べて自己の行動があらゆる点において非常に未熟であつたことを恥じています。いくらブルジョワジーが姑息な手段で革

命運動の前進を人民の前にひた隠しにしようとしてもそれは不可能であることが証明されました。今回のことは決して、日本人民にとって不名誉なことではありません。国際通信網を通じて公然と「日本人ゲリラ」という言葉が使われていること、このことが何よりもそれを証明しています。一年前はどうかだっただけでしょうか。なんで我々日本人には革命的ゲリラができないのか—こんな思いにとらわれてはいなかったでしょうか。半年前ですら、私があえてあのような行動をとらざるをえなかったことによってもわかります。今や、極東の赤い星は全く希望に輝いています。あのような勇氣ある青年が出現した以上、もう私なんかどうなってもいい—これが率直な感想です。もはや滝田修と雖も三島由紀夫を賛美する必要はなくなっただけです。さらに、もっと意義ある前進のための行動が続くでしょう。支配階級は完全にウロタエています。武器を持った革命的行動を「大管法」で抑えようというバカまで出て、文部省からさえ「それは無理でしょう」と言われたという笑い話まで出てきました。「青年はゲリラをめざす！」これが現代のスローガンであります。

私の裁判は不可避免的にゲリラをめぐる階級的論戦になるでしょう。事件の最初の報道から、狙われたのが警察官であったことは治安当局としても隠すことができなかつたのでした。また、幸か不幸か、一市民が武装警官を襲撃したということになっていきます。しかも彼等は精神異常者の犯行としてウヤムヤの内に葬り去ることもできず、公開裁判を開かざるを得ません。したがって私は共産主義者としてばかりではなく、市民としても武装警官を襲撃することの正当性を主張する権

思います。にもかかわらず、私はできるだけ多くの人々が私の裁判に注目し、関心を持ち、できるならば連帯し支援して下さいることを願わずにはいられません。それは何といつても、これが権力に向けて弾丸を放った者に対する我々の運動の中では、最初の裁判だからであります。私は、それにふさわしい態度を持って裁判に臨み、自己の信念と階級的立場と戦士としての誇りを貫く決意であります。

一九七二年六月三日

東京拘留所にて

『筑声』一九七二年七月一〇日号外

利を保持していることになりません。羽仁五郎氏も言っているように、そもそも都市の中で兵舎があること自体が特殊日本的な異常なことであり、都市の中で国家機構に属する特殊な集団だけが武器を所持しているというのも異常であり、これらこそが市民に対する反乱を意味するものにほかありません。だとするならば武器を奪還するための行動は、市民としては当然の権利であり、これは抵抗権以前の問題ですらあります。このような異常な社会こそが暴露、非難されなければなりません。また階級闘争のことは別にしても、在日中国人、在日朝鮮人さらには沖縄返還という形で国内植民地を形成している以上、国内で戦争が日常化するの当然であり、それはまさに現在の資本主義国家自らがそのように仕向けているのであります。さらに企業公害は多くの人々の生命を奪い、緑地帯の欠乏は多くの呼吸器障害による死亡率を高めています。これら、人間の基本的生存権をめぐる一般市民の闘いも武器をもった闘いなくしては解決しません。チツソの社長がフンゾリ返って生きていられるのも、全くのところ共産主義ゲリラの怠慢というほかはありません。共産主義のゲリラは闘いの戦術の巧妙な選び方によっては、多くの一般市民の支持すらも得られるものであります。だからこそ、戦術とか戦略とかが意味を持つのであります。私の場合には一般人が重傷を負いました。権力はそこを狙って集中攻撃をかけてくるでしょう。私は当然罪のない被害者には謝罪します。しかしながら一般市民だからゲリラには関係ないとか階級闘争には関係ないというような意識には断平として挑戦します。権力に対して、一個人として武器を向けた者に対する裁判は厳しい条件にあると思いません。そのような私を支援する活動もまた厳しい決意が必要であろうと

## 赤軍の同志たちへ

レンセキシントウガプロレタリアカクメイハデアリジンミンミンシユ  
シュギハデナイナラバコウゼントシジセイメイヲダスヨウイガアリマ  
ス「ヘンマツ」チバマサタケ

モリツネオサマ 二月二八日朝  
ハンスタケンゲンノハタノモノトプロドクハノセキゲンヲケンセウシ  
ヨウ「チバ

チバマサタケサマ 二月二八日午後四時四七分(消印)  
シントウハシユクセイトモニカタイシマシタ」プロカクメイハメ  
ザシテジコヒハンフカメマス」モリツネオ

私にはどうも納得がいかない。絶対納得がいかない。

東拘では、一月一日の夜、七時のニュースも過ぎた歌謡番組の途中  
で「ここで只今はいりましたニュースをお伝えします。連合赤軍の  
……」で放送は一時消されてしまい、すぐ再開された。その中断時間  
が比較的短時間であったので、救出のための作戦がおこったのでない  
ことは明らかであり、しかも「連合赤軍の……」で語り始められたもの  
なので残る解釈は只ひとつしかなかった。再開された歌謡番組では司  
会者が「ちょうど森進一さんのレコードをかけようとしていた所だっ  
たのでアレでしたわ」と言ったので、ほぼ事態は察知できた。われ  
われは二月二八日の朝から一月四日の朝までは発信不能の状態にお



かれており、新聞も三日まではこないことは明らかだった。われわれはそのような状況でひとつの確信的な予想を前にして思考を進めなければならなかった。

すでに周知の如く、私はこれまでの発言において連合赤軍指導部を無思想に批判した獄中の幹部たちに対して一定の怒りを表明してきた。それは権力の手によって暴露された暗黒の事態を大衆の前に隠そうということでもなければ、知らん顔しているということでもなかった。党外の一般大衆からは、あるいは種々な立場の言論人からも徹底した批判を受けるべきであり、われわれはそれを良く聞くべきであることは勿論であった。しかし私が怒ったのは、この困難な局面において当事者に連なる革命家たちが見るも無残な動揺と不確信しか示さないということであった。まるで自らも大衆の一員であるかの如く取りみだし、あたりをかまわずわめき散らし始めることを制止しなかったし、また、それが始まってしまつてからも止めるように発言した。「リンチ・殺人」などというキャンペーンを張られるような事態が良い事か悪い事かなぞということでは意見の違いはおこるはずもないのだから、わざわざそんなことを、さも自分だけが感じている事でもあるかのように大げさに語る必要はなかったはずである。また、「リンチ・殺人」をもたらし思想の欠陥を自己批判し、克服する緊急な必要があるということならば、その発言者自体においては確かにそのような欠陥は克服されており、従つて組織全体としても克服できるような展望が、その発言者の認識内容＝思想内容のうちにかがわれるということが大衆にわかるような形で為されるべきであり、逆に、その発言者自身の発言態度や発言内容のうちこそ「リンチ・殺人」へと至つ

経済学者の宮川実を指名したり、有名な獄中転向者河上肇にパトスを学べ、なぞと奇怪なことを言いはじめ、上野くんは、ベトナム労働党の立場から中国共産党を批判するというポーズを取りながら、一方では世界革命戦争を語り他方では平和共存政策を弁護するというペテン師まがいなことをやりはじめ、さらには、相模原闘争に触れて、共産党のテントを襲つてはいけないと語り、トロツキーの影響を受けてきた日本の革命的左翼を否定して民青の肩を持つに至っている。連赤問題以降の百家斉放がこのような恥ずべき事態に至ってきたことを確認するとすれば、このようなこととの関連において連合赤軍内党派闘争における「新党」が目指したものと、というより連行赤軍内の赤軍派指導部である森恒夫が代表していた路線が何であつたかが注目されることにならざるをえなくなつてくる。

最近、復刻され、再発表された例の問題の『赤軍』特別号の内容を見ても、たしかにゲリラ路線が再び連続蜂起路線へと逆転していたり、あるいは一二・一八路線におけるものとほぼ同一の問題意識にあると見られる「スターリニズムと反スタ・マルクス主義・トロツキズム」の克服の提起が中途半端であり、どつちつかずのものになっているくらいがあり、その他の問題でも種々の限界や疑問点が多い。にも拘わらず、この『赤軍』特別号から、『銃火』創刊号さらには『二・一八アピール』へと続くラインは少なくとも、現在獄中に居る、あるいは最近まで獄中に居た赤軍派第一次政治局員の毛沢東万歳主義と比較するならば明らかに、共産主義者同盟の知的伝統により近いものであり、少なくともプロレタリア独裁派の赤軍ともいべきラインを代表している」と位置づけることが出来る。言葉を変えて表現するならば、毛沢

た必然的な思想水準があらわに示されていることが誰の眼にも明らかになつてしまふような低水準での発言をするべきではなかったはずである。一例だけを挙げるならば、赤軍派にしろ革命左派にしろ、それぞれ毛沢東の基本的文献は良く読んでおり、従つて双方とも「人民内部の矛盾は：」というような事は良く知っているはずなのに、何故あのような事態が起こらなくてはならなかったのか、と一般大衆が考えている所へ出てきて「人民内部の矛盾の解決方法を誤つたらだ」なぞと言う事は誠に読者を愚弄すること以外のなにものでもないし、自己の無思想を全て暴露すること以外のなにものでもなかったわけである。従つて運動の前進に役立つような発言をするだけの自信のない者は沈黙するべきであつたし、発言する時は揺るぎない確信に満ちあふれた態度表明をしつつ大衆に有効に語りかけるべき機会を注視すべきであつた。およそ、そのような理由によつて私の発言があのような形で為されたわけだが、その後、事態の進行は別な局面を展開することになった。

恐慌と混乱の諸氏による発言がひとまわりもふたまわりも過ぎてみると、そこに現出してきたのは、「リンチ・殺人」＝「粛清」についての一時的な混乱や動揺ではなく、第一には、大量の軍事清算主義者の登場であり、第二には、百年おくれ、二百年おくれの「人民の友」ばかり満ちあふれており、プロレタリア独裁派の赤軍兵士が只のひとりも見出されないという誠に驚くべき事態であつた。当初、八木くん、花園くんが代表される「転換」の主張が軍事清算主義、非武闘大衆路線として登場してきた時、塩見くんは、銃撃戦を支持したのは誤りだったと言ひ出し、さらには、資本論を勉強するのにスターリニスト御用

東路線を一定程度は評価しつつも、決して毛沢東思想をもつて自己の立脚点とは考えない「プロ独派」の立場を踏みはずしたのではなく、毛沢東万歳主義への「転向」は行われてはいないと断言できる。このように見てくると、所謂「粛清」の問題も、決して「作風」の問題や「性格」の問題や「個人的能力」の問題や「特殊情況」等の問題としてではなく、革命左派の諸君が語つているように明瞭に「政治路線」の問題として、そして、まさにその内容の点では革命左派の諸君が語つている「反米愛国路線の放棄」とは正反対のもの、つまり、「反米愛国路線を批判しつつプロレタリア独裁派のもとに正しく包括できなかった」問題として、その本質が把握されなければならない。つまり極言すれば、新党形成の失敗としての観点から総括の基軸を立てる必要があるということになつてこざるをえない。これがまさに、塩見くんや上野くんが最終的に何処に行き着いたか、ということをして全ての人々が見定めた上での参照でもあるわけである。

このような事態の進展の上で立つて、さらには連合赤軍系の赤軍派同志なぞとの一定の討論も踏まえて、単に清算主義に反対するのばかりではなく、明瞭にプロレタリア独裁派の赤軍を建設する思想的・政治的・組織的な任務という自覚を得た時、所謂、森指導部との討論は不可欠なものとして設定されるに至つた。連合赤軍「事件」の最も本質的な事柄を産湯とともに洗い流さないためにも、それは早急に為されなければならない。また、私自身も七三年からの一切の活動を「プロレタリア独裁派の赤軍」を建設する任務に集約する決意を固めたのだつた。

他方、一月下旬から二月下旬にわたつて発信された九通の書簡

の中で——これは塩見同志が銃撃戦支持を取り消した文書が獄中に入った直後から始められたものだが、この書簡のはじめの方で、連赤指導部が『公判通信』に公表された書簡において自己批判していることを批判し、坊主懺悔をするくらいなら死ぬべきであると言ひ、反対に断乎たる態度で公判を待つことなしにただちに闘争を開始すべきである、と激した。これは九通目が外部に届いてから印刷に入ったと聞いているので、最初の部分すらも連赤指導部のもとへは届いていないと思われるが、そのような私の側の経過を経て、冒頭表記の電文が往復された。この時点では（森の返信の時点では）『査証六号』の復刻文は読まれている事と思う。その結果、私は、森の自殺説には全く納得がいかない。私の問い合わせ方が悪かったために、森の返電では、自己の内心の確信が喪失しているのか、「新党」の組織的解体についてだけ言っているのか不分明なものになってしまった。彼の立場からして、自己批判的な体裁をとるのはやむをえないものだろう。しかし、消印の日時が語るところによれば、森は、二八日の朝をもつて一切の発信が年度末により停止されたのにも拘わらず、普段でも発信できないような午後、それも御用おさめをした後の二八日午後にわざわざ特別発信をしている。このことは、この電文が単なる通り一遍の返礼ではないことを明瞭にしている。毎朝、点検の直後に受けつける電報発信以外の時刻における発信は特別緊急の用件であると内容的に認められるもの（家族の危急時）以外は受けつけられるものではないし、森の返電は明らかに獄中同士の連絡であり、しかも「今年は二八日朝で全てを終了する」と念を押された後のことであり、相当の押し問答のすえに発信できたものと思われる。私の所へは二八日の就寝時を過ぎ

も独力で公判費用を稼ぎ出すためと思え、並ならぬ決意とも受け取れていた。私は、彼が他の同志への便りで、連合赤軍の地平を絶対に一歩も後退させずに闘うと、と言っている間接的に聞いている。塩見、坂東両君宛の書簡が「遺書」であるのかどうかで明瞭にはなるのだろうか、どうも釈然としないし、非常に無念である。

ところで、これが「自殺」であるとし、果たしてこのよう事が、連赤指導部を眼の仇にして非難していた諸君の望んでいた結果なのだろうか。それとも自分の手で「処刑」が出来なかつた事を悔やんでいるのだろうか。「唯銃主義敗れたり」などと大見出しで書かれ、最も象徴的な形で内面的な敗北が喧伝される。これが彼らの期待したことなのだろうか。森は最高責任者であつたということだけでなく、銃撃戦には直接参加できなかったために、獄中での期間は余計に苦しかったにちがいない。だが、彼には、当然種々の事が自明であつたろうから、「同志ごろし」という件について、多くの同志から批判される事それ自体は意外なことでも何でもなかつたろう。その批判に耐えることは非常にづらいことにはちがひなからうが、自分の妻を同志によつて殺されている人間はもつとつらいだろう。だから、森はすくなくともそのつらさを理由にして自殺することは決して許されたいし、また、彼の意地としてもそれはしないはずだ。彼は塩見・上野両同志に「批判をしてください」と言っていた。だが逆に彼がこれら両君に見たものは何であつたか。それは、まさに、彼が共産主義者同盟の赤軍派としての党派性から反米愛国戦士たちを吸収するべく試みた「新党」の方向とは全く逆にスターリニズム人民民主主義派へのまつたき屈服ではなかつたか。従つて、彼が自己の責任にかかる「新党」を、すべ

てから届き、その夜は見せてもらうだけで翌日に落手した。私は、この森の「行為」を決意表明と基本的には受け取っている。従つて、どうにも納得できかねる。

読売新聞によれば三一日づけの塩見宛書簡、一日づけの坂東宛書簡が「遺書」として残されているという。われわれがそれを聞いたのは二日夜七時のニュースの時間である。二八日午後に発信したと思われる私宛の電報は、すでに氏を決意していた人間のものとは思われない。だとすると、それから塩見宛書簡が執筆されるまでには、およそ四八時間とみてさしつかえがない。その時間、おそらく彼は私と同じように『査証』六号を読んでいたのであろう。『査証』六号に彼の論文が復刻掲載されたこと、私からの電報の内容、これらは少なくとも彼の気持ちの面ではプラス要因として作用したはずである。さらに内面的なものを全く別に見てみても奇妙なことばかりではないだろうか。拘留所ではヒモ類はいっさい許可にならない。タオル一本は許可になり、決して二本は入らず、あとは半裁のものばかりである。つまりタオル一本では実際問題として不可能なことは当局が認めているわけで、これは留置場でもさうだ。さらに午後一時五十分ごろ発信で、三時五分ごろ死亡確認、そして臨時ニュースは七時すぎ、という時間間隔もおかしい。そもそも決意があつたとしても、看守の眼を盗んで実行する以上、真昼間というのはありえない。どのように考えたにせよ機会は無夜中の方が圧倒的に多い。まして発作的なものでない以上、全く納得できないことばかりだ。前から伝えられていた新聞記事によれば、彼は五〇〇枚ほどの「闘争記」ふうのものを書きためていたということだ。これは、彼らが全く孤立し、外部からの支援がない場合で

ての人民民主主義派小ブルジョワ独裁派から政治的組織的に訣別したものと把握しないで、今までの赤軍派の継続として位置づけている限りは、第一次政治局員たちの精神的崩壊から絶望へと直結せざるをえない。何故に旧赤軍派の有力幹部の中からは只のひとりも公然と「新党」を擁護する者が出なかつたのか。革命左派が「新党」を批判することによつて政治的に自己の立場を鮮明にしているのに対して余りにも無責任ではないだろうか。これでは、誤りはあつたにせよ、連合赤軍は何のために闘つたのかわからなくなつてしまふ。闘つた者をこのような位置に追いやってしまふことだけは絶対にすべきではない。これは、個々の誤りなぞよりは、Fに重大な問題である。連合赤軍裁判というのは彼我の攻防にとつては重要な闘いである。自己批判をしる、なぞという方針を出すバカが何処にあるか。人を殺しているのだから、それについて自己批判するということの明確な結論は自らも死ぬという以外にはないだろう。では革命運動の頂点で闘つた者が自殺するなぞということをしたら戦線への影響はどうなるのか。こういう事をあらかじめ考えた上で発言しなければならぬ。それが政治というものだ。単に自分の意見を言いたい時に、自分の感情のままに吐露することだけならばどんなバカでもできる。私は森を免罪しろなぞとは一度も言っていない。私が言っているのは、まず、連合赤軍の囚われた戦士たちを、敵に対してしっかりと共産主義者として闘わせるように全力をあげることが第一の任務だと言つてきたのだ。このことがわからない者は革命運動から手を引いてもらいたい。自分が大勢の者からつるしあげられるのを恐れることにきゅうきゅうとして、人から批判される前に自己批判をしてみせて少しでも楽にならうなぞ

と思う奴はそもそも革命運動に入ってきたのが誤っている。結局、最悪の事態になったではないか。「同志ごろし」よりも最高責任者の自殺の方がよっぽど階級闘争に悪影響を与えずにはおかない。それとも、誤りを犯したが死をもつて償ったが故に無罪とする、とでも言うていられるのだろうか。共産主義者はたとえひとりになろうともプロレタリア独裁の旗を掲げて闘い続けなくてはならないことは余りにも自明なことだから、森の個人的弱さなどについては何も言うべきではない。それは、森が「総括」された兵士を批判したのと同じことになるだけだろう。そして、森が自殺したのだとすれば、それは「リンチ・殺人」＝粛清の責任をとって死んだのではないことだけは明確にしておかなければならない。そういう理由ならばもっと早く結論が出ていたはずだ、ということはある程度までもなく明らかである。かなりの時間がたって、しかも、公判を目前以来の死、あらたに三人の統一公判希望者を加えつつあるという段階での死というものは、それが最高責任者のものであるだけに、個人的なレベルで考えられてはならないだろう。彼が、塩見・上野両君の最近に至る発言を見て赤軍派の精神的崩壊を、その最高指導者の裡に、自己が先輩指導者として仰いできた人間の裡にまざまざと見たとするならば、彼には①すべての獄中幹部を除名して自己が赤軍派の正当な継承者であることを鮮明にするか②「新党」を赤軍派を越えるものとして新たな路線を提起するか③自己より先輩の赤軍派指導部に従って毛沢東路線へと「転向」するか、この三通りの選択しかなかったであろう。だがしかし、彼の立場は、革命左派系の連赤指導部のように、獄中旧幹部の路線を否定して、そのような分派闘争を経て「新党」に至ったわけではなく、赤

世界単一プロレタリア革命・反スターリニズム（小ブルジョワ独裁打倒）・建軍遊撃戦の思想に貫かれたプロレタリア独裁派の赤軍を建設することが急務である。いっさいの小ブルジョワ人民派と政治的組織的に訣別し、その上で反米愛国戦士とのねばり強い討論を組織することが必要である。意見の分岐点が鮮明になることは解決へ向けての第一歩であるから、われわれは赤軍派系のすべての中間的な人民民主主義者たちが反米愛国路線のもとに結集することを歓迎する。わけのわからないような奇妙な中間主義的言辞を並べるよりも、毛沢東派としての首尾一貫性をもっている反米愛国派へと結集してくれた方が論争が明快になる。討論は反米愛国派とプロレタリア独裁派の間で厳密に行われるべきであり、いっさいの自称中間派などは消滅すべきである。元日の突発的な出来事のために今回は飛び入りの記事になってしまったが、次回からはわれわれの間での緊急な論争問題にすべてを捧げたい。いっさいの小ブルジョワ独裁派と訣別し、プロ独派の赤軍を建設せよ！

一九七三年一月四日

千葉 正建

追記・私には、私の九通の書簡が年内に配布されていけば森の死は防げたような気がしてならない。

軍派創立以来の党派性を継承しつつ「新党」に至っているだけに、赤軍派創立当時の幹部たちの解体と路線転換（一年に一度は必ず転換する）および獄中からの「批判」は彼の立場を無へと導くものでしかなかった。彼が旧赤軍派以来の黨員として法廷に立つ限り、そして獄中幹部の低位に立つ者として自己規定している限り、彼には守るべき何もものもなくなってしまうたし、語るべき言葉は失われてしまっていると言って良いだろう。連赤新党が旧赤軍派の否定の上に立つものならば、彼は獄中幹部の「批判」と対決することが出来たであろうし、また、たとえたつたひとりになろうともそうする義務があった。だが、森にとつての「新党」はそうしたものでなかった以上——たとえ破防法公判での「毛沢東を父として……」という塩見発言への反撥はあつたにしろ——連赤指導部を弾劾した獄中幹部は、いつたい連赤公判において、森に対し、敵権力と一般市民と武闘派の同志たちの前で如何なる発言をせよと指導するつもりだったのか。そのような緊急な第一級の任務を全然放棄して、自己の責任を逃れるためだけ「われわれにも共通した欠陥だ」などと語ることは見えずいた子供だましの言いのがれと卑劣な自己弁護であろう。殺された者も、また、殺した者であった、という事実を踏まえている都委員会の発言の方が余程冷静に事実を見つめている。挫折だとか敗北だとかを語ることが左翼的なポーズであるかの如くに考える風潮が二三年前から今まで一貫して存在することは、その運動が小ブルジョワ的な幻想によつて支えられていることもつとも雄弁な証左である。もういいかげんに、こういったばかりらしいことからは脱皮しても良い時期にきている。今回をもって、その最後の戒めとするべきである。

血よりはじめて詩にいたる 他三篇

——アイヌ文化協会 四・二八集会へ——

千葉正健（在東京拘留所）

千九百七十七年四月二十三日特別発信

血よりはじめて死にいたる

血は死につうじずに詩につうじる

詩は季につうじずに氣につうじる

氣は意につうじずに胃につうじる

胃は火につうじずに日につうじる

日は地につうじずに血につうじる

血は死につうじずに詩につうじる

強殺未遂とうたわれて

洞察未酔のその果てに  
喪学離壘のその果てに

洞察未酔のその果てに  
放埒氣隨のその果てに

洞察未酔のその果てに  
浪客棄類のその果てに

洞察未酔のその果てに  
忘却悲涙のその果てに

五年をすぎてあと三年

ここで

牡羊座を

六回もむかえたから

上告趣意書をかかなければならない

あのときは

青年

起立

を求める声がないわけではない

鬱に

耐える内容がないわけではない

しかし

本来に

存在は

思想に

転化する

のだろうか

思想が存在を撃射する

思想が存在を変形する

思想の存在化は

存在の思想化を

前提する

存在が

存在のまま

存在を

存在させる

と報じられもしたし

写真もなかなかいいものがあつた

いまでは

陽断ち

になおます

いろのしろさ

しか残っていない

精神はとしをうしない

だが

認識のほう

他人との断絶ばかり触角を向けたがる

いまでも

環状の共同体

をつくるとしたら

どのていどの相互移入が可能だろうか

なんでも

ひとりではじめてきた

が

他人の心を

限定

するよう

なってしまう

矛盾さえ

認識していない

原初の矛盾

それとも

別の場所では

別の踊りが

あつた

とでもいうのだろうか

そつちへ

移って行つた

もの

も

いた

だが

わたしは

自分の血のつながりを

切断せずに

やってきたのだ

たとえ

自分以外の者の無思想性を熟知していたとしても

音頭をとりながら

手拍子を打ってきた

いまでは

おまえは血がちがう  
といわれている  
ちがうのは存在だろう  
といいかえしたくもなる  
政治が破壊される  
上告趣意書をかかなければならない

わたしは  
ちいさなパドックで  
マラソンを続けている  
映画を観ることができなくなって  
シナリオを見ている  
音楽を聴くことができなくなって  
詩を聴いている  
ながい時間  
をあたえられたおかげで  
頑固な神経症  
とも対決することができた  
実際には  
十数年ぶりに  
希望と計画  
をとりもどしているのだ

こんど

このように云ったやつが  
前世紀に  
いた  
えらいやつだ  
と謂われている  
わたしも  
そうおもっている  
しかし  
ちよつと  
曖昧だな  
情勢と任務のかみあい  
分析と方針のゆきもどり  
これらがいつも  
二元的に分裂する傾向があるな  
もつと確実ないかたはないのかな  
それに  
俗物史観だな  
とおもう

わたしの家のちかくに  
こどものころから有名だった  
巫女  
で

あかるいところへ  
でるときには  
顔も知らぬ  
若い戦友  
がいるかもしれない  
もしかしたら  
いつか  
彼女の肉体に  
手を触れる  
ことが  
できるかもしれない  
もしかしたら  
わたしがわたしに  
なること  
が  
できる  
かも  
しれない

一個で完結するテーゼ

奴隷の数が殖えるのが法則なので  
そのうちに主人が敗けるであろう

おふみさま  
と呼ばれているひとがいる  
おうかがいをたててみた  
むずかしいみやびなことばがあったが  
沙庭  
にさぶらいたてまつったつもりになって  
媒釈したものを紹介しよう  
えらいやつ  
が云つたものよりも  
ずつとわかりやすく  
ふかく  
正確な  
はずだ  
のたまも  
宣く  
しもべやつこらのこうみがなくなれば  
かねもちものもちのあそびもなくなる  
ゆめゆめうたがうなかれ  
かしこみてまつらうべし

## 『七つぎ徳二著作集』第一巻解説

本著作集第一巻には、さらぎ徳二の一九六〇年代の著述が収録されている。

さらぎ徳二をよく知っている人や活動をともにした人、さらには論争をかわした人などにとっては、基本的に解説文など必要ではないだろう。しかしながら一九六〇年代といえ、すでに四十年前のことである。世界の情勢も大きく変わった。このような事情のもとに著作集が刊行される以上、若い読者のためには若干の説明が必要だと思われる。

しかし、実際に六〇年代について何かを書こうとすれば、非常に大きな困難を感じざるをえない。六〇年代の革命運動や党派闘争に触れるためには特定の視点が必要であって、一般的な観点からの客観的記述などというものは絶対にありえないのである。単なる事実としての統一史や分裂史を記述するとしても、それは不可避免的に特定の視点からの記述にならざるをえない。

当刊行委員会は特定の立場に立つものではないし、特定の立場に立つ者に依頼された仕事をしているわけでもない。共産主義者同盟ということを共通の前提にしているわけでもない。したがって、六〇年代を概観するとか総括するというようなことに踏み込むわけにはいかないのである。言うまでもなく、刊行委員会を構成する個人個人にはそれぞれの立場も見解もある。しかし、それは、また、当刊行委員会とは別のことがらに属すことであろう。

以上のような事情により、本解説文は、ただただ著者の文章に初めて接する若い読者のために若干の参考事項を記すに留まらざるをえないのである。

### (一)

さらぎ徳二は一九二九年六月二五日、当時は日本の植民地であった台湾の高雄に医師の息子として生を受けた。本名は右田昌人である。

敗戦の時一九四五年は旧制中学の四年生であったが、その間、少年兵としても戦争の実験を経験し、また、日米戦争以前には、尊敬し慕っていたであろう軍医中尉の次兄が軍部に抗議して将校会館(九段会館)で拳銃自決するという痛切な事件にも会っている。

敗戦後は大分県中津市に引き上げ、旧制中津中学に編入したが、五年生の時、共産党指導下の活動に集中したため、退学処分を受け、以後は活動に専念する。

一九歳の時に父が死去する。その後の共産党の五〇年分裂では所感派に属し、当然、逮捕歴もあるが、五年には大分県北部地区委員長として活躍し、二四歳の時に喀血する。

五四年の春、肺葉切除のために上京するも、党からは面倒を見てもらえず、中野療養所で手術を受ける。共産党の第六回全国協議会の開催による統一療養所に居る時に知るが、すでに離党の決意は固まっていた。

療養生活を終えてから五六年一〇月には産業労働調査会に勤務し、『産業労働月報』にハンガリー動乱に関する文章が掲載される。そして、このころ、利枝夫人と結婚する。

五九年の四月ころには共産主義者同盟の存在を知り、六〇年四月

二六日の国会チャペル・センター前の集会には夫人と共に参加したという。

六二年のメーデーで、社会主義青年運動(SM)と出会い、夏には最年長の新人として組織に加盟し、教育部長として『資本論』の講義を続ける。

六四年八月、『マルクス・レーニン主義』派、SM、電通ブンドの三グループによる共産主義者同盟の結成で政治局員となり、組織名を仏徳二とする。その後、関西ブンドとの統一によって全国組織を形成するという方針をめぐって、それに反対する旧ML派の半数ほどが分離し、逆に独立派が合流するという過程を経て、六五年六月に関西ブンドとの統一による共産主義者同盟統一委員会が結成され、仏徳二も引き続き政治局員となる。仏徳二が主体的な政治活動を開始するのは六五年の秋からである。

六六年一〇月、『マルクス主義戦線』派との統一により共産主義者同盟第六回大会が開催され、政治局員。六八年三月、第七回大会での旧マル派の離脱を経て、同年一二月の八回大会で議長に就任する。六九年四・二八沖繩闘争で破壊活動防止法の適用を受けて逮捕状が出され、七月六日の赤軍派の襲撃によって重傷を負い逮捕される。このあとは武装闘争と分裂の歴史である。

七〇年代のことについては、あまり書くことが適当ではない。さらぎ徳二は一年九カ月ほどの拘留所生活の後、保釈になったが、破防法被告の身で地下に潜った。議長という立場にあったためか、正式の分派結成は他のグループよりも遅れた。はじめは南部地区委員会の『鉄の戦線』誌によって政治的理論的主張をしていたが、やがて新聞『蜂

本パンフ未掲載のその他の主な論文

一 発の銃声はなにを呼びよせたのか―二六銃打銃警官狙撃闘争 『情況』1972年6月号(※本パンフ収録の『銃声』号外アビールに加えて「獄中からのアビール」の併載)

ゲリラ戦から始めようドブレの「革命」概念の転換に答えて 『情況』1972年11月号(『銃声』第一号にも収録)

革命の方法としての軍事 『銃声』第一号(1972年9月9日刊)

ゲリラをめぐる討論は戦略戦争である 『銃声』第一号

日本における革命の現在の地平(上) 『序章』第二号(1973年5月刊)

日本における革命の現在の地平(下) 『序章』第十二号(1973年9月刊)

1974年12・18「武闘派政治集会」へのアビール 『獄中通信』No.1(1975年10月)

事務局が把握している千葉氏の主な論文は以上です。その他、千葉氏の論考について詳細をご存知の方は事務局まで一報のほどお願いいたします。

起』を発刊して蜂起派を名乗った。「さざぎ派」と呼ばれることが多かったが、七〇年代、八〇年代、九〇年代と経過して、九八年一月には自ら作った組織に対して『離党の決意』を書いた。

二〇〇二年六月には最高裁で破防法の有罪判決があり、翌二〇〇三年四月一三日に永眠した。享年七三歳であった。終始行動を共にして地下活動と公然面との接点の活動はもとより、破防法被告団の活動も担った有泉亨治（町田必殺）が彼に先立って二〇〇二年一月一日に他界したのが両者にとっても、そのほかの人にとっても、痛切きわまりなく、残念なことであった。さざぎ徳二は、現在、多磨霊園で眠っている。

## (二)

さざぎ徳二の著作活動は多岐にわたり、かつ、大量である。

単行本として上梓されたものだけでも、『世界暴力革命論』『宇野経済学体系の批判』『天皇論』『日本資本主義の原像』『我かく闘えり破防法闘争三十二年』という基本的な著述があり、パンフレットとして出版されたものには『ソ同盟と人間疎外』『資本論点前』『先行性ファシズム論』『帝国主義崩壊の原理と形態』『日本ファシズム論』『理論の仏教』『民族問題』パンフなどがある。さらに、個人署名の雑誌論文も多数存在し、無署名の機関誌論文には一冊の著書に匹敵するほどの長文のものも少なくない。数百号にわたる新聞『蜂起』の一面論文は、ほとんど一人で書いていたし、共著もある。当然、座談会や対談、インタビューもある。非常に残念なことには、著者の自宅が火災に見舞われて全焼したために、存在したであろうノート類や書籍が失われ

一次共産主義者同盟が解体して以降、その再建を目指して歴史的に形成された諸組織が合流して第二次共産主義者同盟が結成された以上、さざぎ徳二だけに言えることではない。したがって、当刊行委員会は、この著作集に収録された諸著作が組織の公認の見解だとか、代表的な立場だとか言って押し出したりするものではなく。しかし、このような事情は、いささかでも彼の著作の意義や価値を低めるものではないはずである。彼の個人的な、そして、組織の指導者としての立場に貫かれた問題意識から発する理論活動とその業績は、その見解に対する賛否は別にしても、圧倒的に群を抜いている。

さざぎ徳二は、共産党時代からの経歴も含めれば、共産主義者同盟のなかでも最も党人としての活動歴の古い人間であり、また、経済学に関する知見も抜群である。そして、勤勉でもあった。一九六八年の激動の時代に政治局を代表して執筆した国際反戦集会に向けた論文（八・三論文第二章）は、その当時のスタンダードな水準を表明してあまりある。その後、みずから議長である期間に最終的な分裂の時代を経験するということになったが、議長として破防法攻撃を受け止め、最後まで被告団としての任務を全うした。

歴史の荒波にもまれて、当然のことながら、さざぎ徳二が所属する組織も変貌せざるをえなかった。六〇年代後期から七〇年代初期にかけての分派の時代に「さざぎ派」と呼ばれたグループは六四年から六五年にかけて形成されたグループを核としていたが、ML派社会学の副委員長で中央大学出身のAが活動から引いてからは専修大学出身の中井正美と医学連のBが中心となっていた。その後、赤軍派との分裂、十二・一八ブンドの一体化の挫折を経て、七三年の蜂起左派の

たことである。彼は府川充男から蔵書の借用・提供を受け、執筆活動を続けた。

刊行委員会は、著作集に収録予定の著述に関しては、誤記、誤植、脱落を含めた初出再現版と、定本として著作集に収録する校閲版との両方のデジタル・ファイルを基本的に終了しているだけではなく、著者が関係した時期の『蜂起』五百数十ページのデジタル画像による保存も完了している。『蜂起重要論文集』も追加発行されることになるであろう。

## (三)

著者のさざぎ徳二は革命家として当然のことながら組織人である。彼の著作活動は、この点に関して一点の矛盾もない。しかしながら、そうであるとはいえ、個人的見解を自由に展開している著述と、組織の公的な立場から書かれた著述との違いは厳然として存在している。組織を代表する立場で文章を書く場合には、いかに大きな影響力を持つている場合に於いても、組織全体の動向を集約するかたちで文章を書かざるをえない。また、逆に、たとえ個人署名の文章といえども、個人の意見を純粹に表明したものは限らない。政治的な立場に立つて文章を発表した人間の著作集を読む場合には、この点が非常に問題になる。

さざぎ徳二の場合について言えば、六二年から六九年にわたる六〇年代のそれぞれの時期において、彼が個人的に提起した理論的見解が、彼が所属する組織の全体に共有されて組織の公認の見解として承認されたということは基本的にはない。これは六〇年安保闘争を戦った第

結成前後を最終局面として、長期入獄

組を含む初期のメンバーの全てがさざぎ徳二の所属する組織から離れたということになる。中大の河合書記長と社学同委員長の久保井が死に、専修の中井正美と前澤昇も仆れた。そして、七三年を境として、「さざぎ派」と呼ばれた組織は組織実体が変わったと言えるだろう。だが、この段階から、「さざぎ派」と呼ばれた組織は、「さざぎ派」と呼ばれた組織ではなく、言葉の真の意味でのさざぎ派になったのである。その功罪は批評する者の自由に属する。おそらく、七三年以降の蜂起派こそが、さざぎ徳二の本質が発揮されたものであろうが、それは、五八年以来のブンドの運動や歴史とは異質のものを多く含んでいたと思える。

第二巻以降の大部分の著述は、これ以降のものと言ってさしつかえがない。さざぎ徳二が提起する個人的著作と組織の基本的見解とが一体化してくるのは、この時期からである。さざぎ徳二著作集という個人の名を冠した著作集に無署名論文を収録する必然性が問われる所以である。

## (四)

さざぎ徳二は共産主義者同盟にとつては外来者であった。もちろん、いかなる人間の場合においても自分に先行する組織に加入するときは、必然的に外来者として参加していくわけである。しかしながら、さざぎ徳二の場合には、そのような一般の場合とは異なった事情があった。それは、彼が革命的経歴の決定的な時点で組織活動からはずれて療養生活に入らざるを得なかったということ、そして、そのよ

うなかたちで共産党から離れたということに規定されている。

彼の同世代の者は、島成郎の場合でも高橋良彦の場合でも、共産党内部での激烈な党内分派闘争を経て、共産主義者同盟を創立したり合流したりしているが、さらに徳二は同様の経過をたどることはなかった。日本の左翼反対派あるいは革命的左翼の運動は、その組織的形成を一九五七年から具体的に開始するのであり、さらに徳二は五六年には療養生活を終えて『産業労働月報』に勤務し、ハンガリア動乱に関する論文を発表したりしていたのだから、時間的に間に合わなかったということはない。黒田寛一の「弁証法研究会」や津田道夫氏の「現状分析研究会」のような研究団体とも接触していない。彼にとつてこの時期は、ただひたすら『資本論』を読み込むことを中心にして、自己再教育と理論武装に集中していたと思われるが、それほど世間を騒がせ、また、新聞や週刊誌にも書きたてられた全学連主流派共産主義者同盟に党的には近づかなかつたということは、何か理由があつたに違いない。いずれにしても、さらに徳二は、五七年から六一年にかけて活動した多くの人間とのあいだに人脈のつながりを持たなかつたばかりではなく、それらの人物の組織的関係や人的関係と経過についての具体的な知見を持たないというハンデを負わざるを得なかつたのである。

しかし、彼をブンドにとつての「外来者」と書いた理由は、そのよ

うな外的な事情によるものばかりではない。彼が五三年から五四年にかけて共産党から離れたのち、再び、組織に加入するのは六二年の夏であるが、その時点では、革共同全国委員会も大きくなつてい

た。また、社青同解放派もあつた。社学同は学生組織に接近することは理論的にも政治的にもありえなかつたのである。さらに徳二が到達した見地は、まさに、このような立場に合致して

いたのであり、したがつて、彼が、旧ブンドや、それ以降の様々な組織に接近することは理論的にも政治的にもありえなかつたのである。さらに徳二が選択した組織は「米ソ核実験反対！ 中国核武装支持！」というスローガンを掲げることになるが、彼が自己の初期の見解に忠実であつたとすれば、世界革命を目指す革命運動の戦略的体系については他の党派の様な見解に対しては明瞭な意識を持つていたであろうし、そのような戦略論的枠組ということが自覚的に把握されてい

れば、一般的に世界のどの地域でも戦いが昂揚しているというようなことをがなりたてるのではなく、誰を倒すために誰と同盟するのか、何を倒すために何と同盟するのかというプロフェッショナルな立場と方策があつたはずであるから、のちの「三プロロック階級闘争」についても、当然のことながら、単なる大衆運動主義者とは違つて、その内容についての厳しい論議をすることになるであろう。こうして、六八年の八・三論文をめぐつて新たな論争が始まるのである。

### (五)

共産主義者同盟は思想的に一体化した組織ではなかつたし、統一した強固な立脚点で武装された組織でもなかつた。いろいろな傾向の人がいるなかで、文学・哲学系統のひとつは黒田寛一に非常に傾倒してい

織であるから、さらに徳二にとつて加入の対象にならないのは当然だとしても、革命的左翼の有力な組織が複数存在していたのである。そうであるにもかかわらず、彼は、それらの組織に加入しなかつた。これは、彼が、旧ブンドに加入しなかつたのと同じ理由によるものと考えざるを得ない。

さらに徳二の、この時点における立脚点は、明瞭に確立していた。本巻冒頭に収録した『ソ同盟と人間疎外』がそれであるが、この著作において、彼は概念的規定は別にしても、ソビエト連邦の現状認識と体制批判において、あきらかにトロツキーの「労働者国家無条件擁護」よりも、トニー・クリフや対馬忠行に近い立場を表明しており、そうでありながら、中国共産党の路線を社会主義的なものとして評価するという独特の見解が記述されている。これは、言うまでもなく、後に登場する様な毛沢東万歳派とは全く異なるものであつて、スターリン主義批判と打倒を踏まえ、それを前提にしたうえで中国共産党への位置づけであつた。

毛沢東とスターリンの間にはいろいろなことがあつたが、それでも、中国共産党はコミンテルンの支部でありつづけたのだし、その言語体系はスターリン主義そのままであるから、スターリン主義打倒の立場と路線に立つ者が毛沢東主義者になることは絶対にありえない。しかし、言葉の問題ではなく、中国共産党の党活動や革命運動には、スターリン主義のレッテルを貼つて切り捨ててはならないものがあつたし、実際にスターリン主義を打倒するためには、中国共産党や南スラブ連邦共産主義者同盟(ユーゴ)、さらにはキューバ、ベトナムの共産党・労働党と戦略的に同盟して世界革命の過程を進まなければならないと

た。要するに、向こうが本家であつて、向こうがあまりにも明瞭に「反帝・反スターリン主義」を掲げているので、組織対抗上、こちらがそう言えないだけだ、という感じであつた。

それに対して経済学系統のひとつは圧倒的に宇野経済学一辺倒であつた。宇野理論については、同盟員の全員がひととおりは読んでいたと思われるが、埴谷雄高や吉本隆明や黒田寛一の本にはあまり関心を持たないという傾向の同盟員も大勢いたのである。

そんな中で最大公約的なものはトロツキーに対する共感であろう。しかし、それとても、トロツキーよりもスターリンに共感している有力なグループもあつたのである。

共産主義者同盟は全学連結成以来の学生運動先駆性理論の流れから、反戦学生同盟(アージャー)の社会主義学生同盟への発展転化という動きの中で結成されたが、共産党内での十分な準備段階を経て別党コースへと踏み出したものではなかつた。五八年五月末の全学連十一回大会直後、共産党本部における党中央と学連幹部の会議における不測の事態の発生(六・一事件)により、学連幹部が党から除名され、当時、綱領的反対派として中央委員会でも半数近い勢力をもつていた、のちの構造改革派からも何のシンパシーも得られず、党七回大会でも影響力を行使できずに同年十二月一〇日に学連新党として出発したのである。

当初は、のちに革共同関西派となるトロツキスト・グループも含まれていた。ブンドなんて統一戦線党として作られたのだ、という外部からの批判を受ける所以であるが、第三回大会で第三次綱領草案を草案として確定するころには、あるいは、それと前後して、一方ではト



ロッキスト・グループを分離し、他方では、社会主義学生同盟とならんでブンド指導下の活動家組織であった社会主義青年労働者同盟を不活動状態にするという過程を経て、六〇年ブンドの態勢が形作られたのである。

全学連十四回大会で唐牛・清水執行部が確立され、それまで「学生運動の転換」という名のもとに合理化反対闘争に主眼を置くという傾向から、全人民的政治闘争としての安保闘争を戦うという方向に進み、五九年十一月二十七日の国会構内突入から、六〇年一月十六日の岸首相の調印渡米阻止のための羽田闘争に至る過程で、全学連は安保改定阻止国民共闘会議から孤立した戦いを強いられた。

そんなころ、ブンドの内部分裂で島書記長から「今までブンドの同盟員は全部、共産党から分かれて来た者ばかりだったが、最近共産党を経由しないで、直接、ブンドや社会学同に加盟してくる人間が出てきた。もう、ここまで来れば大丈夫だ」という苦難の創立者ならではの痛切な言葉を聞いた。四月二十六日の国会チャペル・センター前の、装甲車を乗り越える闘争のときには、「我が方には軍師がいらない」という某幹部のつぶやきも聞き、全学連十五回大会では、京都府学連代表の「関西には国会議事堂がないから、やりにくい」（爆笑）という発言も聞いた。

五月十九日の安保条約批准の強行採決により一般市民の憤激が頂点に達し、連日の国会デモのスローガンや掛け声が「安保・反対」から「岸を倒せ」に変わって、闘争の波が拡大するなか、六月十日には、それまで過激な行動には反対だと思われていた全学連反主流派がアイゼンハワー大統領訪日の下準備に来たハガチー報道官を羽田空港に迎え撃

の政治的方策を探ることが出来ず、そのような姿勢すらなかったことよって、そして、第二には、六月十八日に何の方針も出せなかったことよって、条約批准の自然承認とともに、その生命を終えたのである。私が十五日から十八日という最終局面で聞いた言葉は、「アイゼンハワーの訪日中止は反主流派の反ハガチー闘争によるものではなく、六・一五のわれわれの闘争によるものだ」というような言葉であり、「もう、岸は官邸の秘密の地下道から脱出してしまつて官邸には居ないから解散しよう」という言葉だった。島書記長の『ブント私記』によれば、共産党の五〇年分裂当時、所感派の中核自衛隊として任務につき、ブンドを創立してからは綱領委員会の長であった生田浩二さんが、十八日の夜、「やっぱりブントもダメだ」と吐き捨てたという。私は、翌日の朝刊で、岸総理が官邸の中に居たことを知って愕然とした。自衛隊を合法的に動かせるのは総理大臣と防衛庁長官以外には居ないが、二人とも我々の包囲下にあったということである。革命運動にとつて革命家が居ないということほど不幸なことはない。要するに学生運動でしかなかったのだ。

私には、その後の分派闘争も、解体過程も、さらにその後の再建統一過程も、安保ブンドの終焉とはまったく別の次元の話に思える。

(八)

六〇年後半から六一年前半にかけて、『革命の通達』派、『プロレタリア通信』派、『戦旗』派として三分解して戦われた分派闘争も、革共同全国委員会に移行する者は行き、残る者は残り、消耗する者は消耗し、運動をやめる者はやめた。共産主義者同盟には統一指導部も中

ち、圧倒的な大群衆で取り囲んで車を揺さぶり、恐怖に顔色なからしめるという信じられない事件が発生し、さらに、六月十五日には主流派が国会南通用門から突入を敢行して東大生でブント同盟員であった樺美智子さんが機動隊に踏みつけられて死亡するという事態に発展した。

死者が出たことにより、国会デモの人数も減るかなという危惧もあったが、予想に反して翌十六日からのデモは、それまでより十倍以上も増えて、とても数を推定できるという程度のもではなくなった。内部の会議で中村光男さんが「いまやブンドは全世界を動かしている」と檄を飛ばすところまでブンドは一気に登りつめたのである。「トロッキスト・挑発者」アメリカ帝国主義の手先」という日本共産党のキャンペーンに対して、香山健一さんが持つてきて見せてくれた中国共産党機関紙『人民日報』の一面全部を使った大見出し「日本人民的英雄・樺美智子」という紙面を忘れることは出来ない。

連日連夜の国会デモは更に数を増し、批准自然承認の十九日午前零時に向けて、状況は四七年の二・一スト以来の、そして、それを上回る重大な局面となった。官邸内では、岸首相の自衛隊導入方針をめぐって閣僚と首相が激論を交わしていた。最終的な勝ち負けがどうなつたかは別にしても、やりたいことは何でもやれる、という状況だった。圧倒的に多数の市民が味方だった。そして、ブンドは大衆の大渦のなかで何も出来なかった。何かをするという方針もなかった。われわれは二・二六までも行けなかった。安保ブンドは、第一には、反主流派が決起したときに、たとえ民族独立路線という方針のもとでの行動であろうとも、それにエールを送り、あらたな局面打開のため

央機関紙もなくなった。社会主義青年同盟『解放』派という新たに登場した組織に行く者もいた。

しかし、安保闘争は政治闘争としての巨大な意義を刻印したばかりではなく、文化革命として大きな変動をもたらした。それまでは共産党の圧倒的な思想的独裁体制のもとでトロツキーやアナキズムの本はまともに読むことができなかったが、まさに思想状況が一変したのである。このことの意義はどんなに評価してもしきれないほど社会全体を変えた。六〇年以後の運動は、安保闘争の主役と謂われた組織がどんなに惨めな状態にあるとも、全学連がどんなに分裂しているようにとも、この新たな画期的な社会的思想的状況という土壌の上に形成されていくのである。この状況は決して逆転することはない。そして、かならず全世界に拡大する。七〇年に向けての巨大な前進が始まったのである。

まず谷川雁、吉本隆明両氏が『試行』を発刊して口火を切った。安保闘争の時には旧ブンドの中から見ていた者には、なんだか変な同伴者がくっついてきたな、と思われたが、勝利だったか、敗北だったかというくだらない総括論議のなかで、敗北だったというほうが左翼的で革命的だというようなばかばかしい風潮が終わつてみると、両氏のほうがブンドよりもずっと深く先に進んでいることがわかってきた。

その後、同誌は吉本氏の単独編集に移行したが、谷川雁のほうは、三池炭鉱争議の收拾のあとという困難な状況のなかで大正炭鉱争議に大正炭鉱行動隊を組織して安保・三池後を戦った。これには、中村光男氏が社会学同グループを引率して接触していたが、谷川は労働者とともに東京に出てきて学生と交流したりした。また、両氏に井上光晴氏も

加えた三人で集会を開いたりもした。

次には清水幾太郎、武者小路公秀、三浦つとむ、香山健一氏らによって現代思想研究会が組織されて『現代思想』が発刊され、研究会や大きな公会堂での集会が何回か持たれた。清水先生は、一九三〇年代の総括をすることが必要だとボルケナウを引用して呼びかけたし、また、前衛党を乗り越えて革命を成功させたキューバ革命の意義と教訓を初めて語って大集会を開催した。

さらに森田実氏が労働運動研究会を組織して『週刊労働運動』を発刊し、最初はタイプ印刷だったが、出版社のスポンサーがついてからは活版刷りで四五判数十ページのものを半月刊で出した。

また、旧ブンド政治局員を含む残存幹部らが雑誌『先駆』を出して論争した（佐久間・芳村論争）。商業出版でも『論争』という雑誌が発刊された。津田道夫氏らの『現状分析』も国際共産主義運動史の総括を連載していた。共産党の党内からは旧志田派の残党ではないかと噂のあつた秘密グループが『鉄の戦線』誌を送りつけてきていた。

このような全般的状況のなかで、共産主義者同盟の名称を継承して機関紙を発行していたのは六〇年の都学連執行委員を中心にしたグループである『共産主義の旗』派だけになっていたが、すでに現役の学生運動に対する大衆的な根は失なっていたし、また、関西のブンド残党は、まだ、関西ブンドにはなっていない。他方、東京南部地区委員会には政治局員以外のメンバーが残存し、学生運動出身の〆氏、〆氏、〆氏も、このグループに合流していた。こうして、難しい議論を必要とするブンド再建よりも、当面は社会学同の再建へと焦点が移らざるをえなかったのである。

するものであったが、結局、このときの『蜂起』の三人組が、のちの『マルクス・レーニン主義』派と『マルクス主義戦線』派、および独立派へと分かれ、さらには関西ブンドと密接な中大グループも含めて、六三年から六四年にかけて東京の社会学同系では四つのグループが形成されることになったのである。

### (七)

他方、ブンド次元でも六一年段階から残党同士の討議が始まっていた。

六一年には、六〇年に共産党の東京南部地区委員会に続いてブンドに合流した長崎造船細胞が組織した長崎造船社会主義研究会の呼びかけで全国交流集会が開かれた。

長船社研は反帝反スターリニズムを掲げていたが、革共同には移行しなかった。このときの集会はブンド系だけの集会ではなく、谷川雁なども参加した。森田実氏が主催した労働運動研究会も代表を派遣したが、最大グループの関西地方委員会は、あまり発言しなかったというところである。しかし、この流れは関西が受け継ぎ、関西を中心に続けられることになる。関西地方委員会から関西ブンドへの胎動と意欲の現われである。次回からは労働運動研究会は代表を送らなかつたが、毎回参加している電通グループの高橋よっちゃん（高橋良彦）が報告に来て、私も森田さんの自宅で彼の報告を直接聞いた。佐藤浩一氏が中心になっているということだった。

毎年一回開催されたこの集会の二回目か三回目には『共産主義の旗』派も行ったと聞いているが、このグループとSMとは六三年に統

ブンドの三分解の時期が終わると、すぐに社会学同再建の動きが始まるのであるが、活動家組織の次元で統一しようとしても、安保闘争の総括とか学生運動論とか反帝反スターリニズムを掲げた全学連に対する態度とかについて意見統一が問われるので一致はむずかしい。当時は東京よりも関西のほうがデモの動員数も多く、マルクス主義学生同盟にたいして社会学同の運動方針のほうが正しいと考える者を元気づけたものだが、関西では何人かの幹部が革共同全国委員会に移行したものの、大部分は旧ブンドの関西地方委員会として存在していた。そのため、六〇年当時の運動スタイルを継続していたのであるが、東京の場合は思想的にも混乱していた。ファシズムを評価するというような傾向も混在したのである。

東大グループから新聞『希望』が出たこともあったが、やがて、早稲田と中大を中心に『セクトの』が発刊され、非マルクス主義が前面に登場した。この時期、古賀という人間が二人いた。ひとりには早稲田の古賀泉であり、セクトのの中心メンバーだった。もう一人が東大法学部の古賀運であり、のちの『情況』編集長である。早稲田の平岡正明による『犯罪者同盟』も注目に値したという状況であったが、旧ブンドの同盟員であった者が活動に復帰するとともにマルクス主義が再登場することになる。

佐竹茂、古賀運、矢沢国光という東大の三人組が〆四判のガリ版刷りで出した『蜂起』がこの時期を代表するもので、なかでも渚雪彦の黒田寛一『組織論序説』批判』は全ブンド史を通じて質量ともに第一級の労作である。この東京の社会学同におけるマルクス主義系統の復活は、学問領域における鈴木鴻一郎・岩田弘西氏の著述活動と対応

一のための交流を日常的に親しく行い、相互に理論問題の報告と討論を持ったが理論的な融合には至らなかつた。『共産主義の旗』派グループは仲が良く民主的でスターリン主義色のない組織であったが、あまりにもレーニン一辺倒で、その点において教条主義的でもあったため、新たな見解を受け入れるという雰囲気はなかつた。SMが関西ブンドの前田氏に招請されてこの集会に参加したのは六四年の春である。中国の核武装を公然と支持する立場と、反戦平和運動の路線で中国の核実験に反対する立場とは、水と油のような激論になったが、ブンドの再統一に関しては、その意志と手順について、よい打ち合わせをすることが出来た。

そのときに決めた手順とおりの順序でその後のプロセスが進行したわけではなかつたが、六六年の最終段階まで何とか達成することが出来た。のちにML同盟を結成した諸君と、この最終段階まで行を共に出来なかつたのが残念であったが、彼らとは、中国問題に関して戦略的な一致があつたのである。おそらく、さらぎ徳一も、そういう思いを共有していたに違いない。

しかし、彼は、私が、みずから組織した組織の党派性を示す主張、そして、彼が同調した立脚点と運動論を、ある時期からは表明することを止めて、ただ統一だけを推進し、それを第一の優先順位として行動したことについて、何も言わずに同伴したのである。

### (八)

関西ブンドの田原芳が、「六五年から、ブンドの統一は急展開した」と言っているように、まさに、そのように進展した。みんなが願って

いたことである。

そこで、さらぎ徳二は、どう考えたのか。彼は「所感」派である。日本共産党史の文脈で言えば、「所感」派は敗北した。彼も、行き場がなくなった。

やはり、究極の問題は武装闘争の問題だと思ふ。「所感」派の問題は、つまるところ、そこに帰着すると思われる。そして、そうであるが故に、彼はブンドにも革共同にも所属しようとはしなかったであろう。六〇年安保闘争に到る学生運動は、かならずしも旧国際派という言葉で括れるものではないが、それでも圧倒的に旧国際派の人脈が主流であったことはまちがいない。全学連の議案書には中国革命の位置づけが全くなかったし、五九年の一月一日に勝利を記録したキューバ革命についても、何の注意もはられなかった。旧ブンドにおいては軍事の問題はテーマにならなかった。これには、やはり所感派アレルギーの影響が大きいと思う。日本の革命運動は、旧所感派的な武装闘争と、砂川闘争から安保闘争に到る大衆的実力闘争とが分離してしまつたのである。

私がバルタイからブンドに移行するとき、現在ある共産党ではなく、あるべき共産党を追求するという運動の流れのなかで、党内改革を指向するグループから離れて別党コースへと傾いたのは、もはや哲学上の問題においてすら、スターリン主義が原理的にマルクス主義とは異質のものになっていることを認識したことが決定的な要因であったが、それでも、中国革命をハード・スターリンニズムの名のもとに切り捨てるかのようなブンドには、その一点において同意出来なかつた。情勢分析から中国革命がスツポリと抜け落ちていような世界認識か

第二次ブンドは軍事の問題に直面し、それぞれの党派がそれぞれの解答を出して実践過程に入つたわけだから、彼に対する評価も様々である。しかし、彼の軌跡は、過渡期世界論に竿さしながらもスターリン主義に逆戻りせず、軍事を提起する場合も大衆運動主義に流されないという点において、危ういながらも彼の立場を貫いたと言えよう。本著作集において、その全貌があまりかきとられるが、武装闘争のなかで、これだけの理論的な仕事を成し遂げたという点だけを見ても、日本革命運動史上まれにみる存在であることは何人も疑うことは出来ないと思われる。あまり政治家としての資質には恵まれていなかったが、しかし、誰もそのことを非難できないのではないだろうか。私は彼ほど一所懸命に革命運動に従事した人間を知らないのである。若いころから病に苛まれたのが不運であった。

『さらぎ徳二著作集』第一巻、二〇〇七年二月刊

らは具体的な世界革命の展望など出るはずはないし、それ以前に、中国革命に対して共感をいだいてないということのほうが、はるかにピンチだと思われた。結局、中国革命に対する評価の問題は保留してもいい、と言われて初めてブンド加盟のサインをしたのである。歴とした所感派であつたさらぎ徳二の場合はなおさらのことであろう。

黒田寛一にしても、さらぎ徳二にしても、年齢的にいうと私よりも十年うえの世代であるが、共通しているのは、スターリン主義批判において、一国社会主義と二段階革命論と平和共存という具合に個の批判点を実体化することである。政治の方法という点での本質的なスターリン主義批判がないのである。だから、戦略戦術についてはスターリンニズムを批判しても、政治の方法において、みずからがスターリン主義に陥っていくことになる。この点はアナキーニズムとの批判的対決を経ないで獲得できない

問題であろう。連合赤軍事件が必然化する所以である。スターリンが日和見主義に陥らず、アメリカを打倒していたならば、全世界は理想の社会になつたとも言えるだろうか。馬鹿馬鹿しくて聞いていられない。日本のスターリン批判の限界であろう。だから、「モスクワ愚連隊」とか「グレムリン」とか謂われるのだ。要するに思想の問題なのだ。

さらぎ徳二の初心は本巻冒頭に収録の『ソ同盟と人間疎外』に顕かである。私は、赤軍派関係者から、「さらぎは革命戦争派というような人ではなかつたんじゃないか」ということを言われたが、この論文を読めば、そうでないことがよく解るであろう。むしろ、その点においてこそ、さらぎ徳二はブンドとは最初から異質であつたのである。

## ブンドと仏徳二

共産主義者同盟の機関誌『共産主義』の創刊号に掲載された姫岡玲治の論文『革命的インターナショナルニズムとは何か?』には「われわれの原則はブルジョアジーとスターリン主義官僚の＜同時的打倒＞という戦略の上になたえられるであろう」という明瞭な文言があつた。また、主要な論客のひとりであつた佐久間元は「反スターリンニズム運動」という言葉を明記していた。要するに共産主義者同盟とは、そのような組織であつた。

一九七二年の連合赤軍事件をめぐる混乱の時期に集會に登場した鳥書記長は「反スターリンニズムなどというのは常識なんだ」と発言した。この発言には二重の意味があると、そのとき獄中に居た私は受け取つたが、すくなくとも、共産主義者同盟が反スターリンニズムの立場に立つていたことを証明するものであることだけは明瞭であろう。

その後、一九六四年の春に関西ブンドの政治局と討論した時には「帝国主義の打倒とスターリン主義の打倒を同列には考えない」とか「スターリン主義の打倒という課題を世界革命の戦略だとは考えない」という見解を聞いた。そして、この点に関する関西ブンドの見解が旧ブンドとは異なる第二次ブンドの立場になつたのである。第二次ブンドはアンチ反スターリンニズムであつた。

私は仏徳二との討論のなかで、彼が「反スターリンニズム」という言葉を、自分の立場を表明する言葉として使うのを聞いたことがない。そういう意味では、彼は第二次ブンド固有の論客の一人であると位置づけられるであろう。

私について言えば、私は、ナチズムとかスターリニズムというもの  
はブルジョア自由主義よりも人類にとっては悪いものだという立場に  
おいて、一九六一年から一九九一年まで一貫してブレたことがない。  
だから、私は、旧共産主義者同盟は反スターリニズムという点におい  
ても革共同全国委員会のく反対反スターリニズムよりも左翼にある  
と考えてきたし、また、そうあるべきだと考えてきた。

反スターリニズムが戦略であるかどうかという問題は一九九一年に  
事実をもつて決着がついた。スターリニズムが自動崩壊したかのよう  
な客観主義的論評は突止千万である。

このことについて仏徳二と膝をつきあわせて討論する場面は、残念  
ながら、われわれには与えられなくなってしまった。

『横峯書月報』二〇〇七年一〇月号

理論の前に心がある 経験知というものにつ  
いての特別な感性——〔書評〕市田良彦、石  
井暎禧著『聞書き〈フント〉一代』

戦術の前に戦略があり、  
戦略の前に理論がある。  
理論の前に思想があり、  
思想の前に心がある。

われわれの〇年安保闘争の世代は、結局、スターリン主義の打倒の  
ために一生をついやしてしまつたわけだが、すでに全員が「〇代とな  
り、共産主義者同盟の戦列に身を投じた者のなかでも鬼籍に入った者  
もすくなくない。

つい最近も私より年下の豊浦清が癌で死んだ。石井暎禧は日比谷高  
校から東京大学というコースにおける豊浦の先輩だが、所属するセク  
トは異なっていた。おなじ共産主義者同盟（フント）と言つても「ざ  
まざまな青春」があつたわけだ。

石井とは昨年二月五日の長崎浩出版記念講演会でも同席したば  
かりだが、私が抱いていた石井への評価は他のメンバーと比べて珍し  
く政治というものがわかつている人間だということだった。いわゆる  
オトナの人間に属していたということだろう。これは石井ひとりにつ  
いてだけでなく、石井が最後に属した「遠方派」という4人組の全員  
についても言えることだ。そして、この点こそが彼等と他のセクトを

分けたものだと言えらると思う。だから、他のセクトに対して理論的な  
対立点を作り上げることに熱中したりはしない。

しかし、学生が中心の急進主義運動において、情熱を注ぐ対象が他  
の多くのものことならざるをえなくなれば、「遠方から」というス  
タンスのとりかたも当然であつたろうし、やがては「新左翼芸能界と  
の決別」をグループとして表明し、その後、石井個人としても「左翼  
から足を洗つた」と本書に書くことになる。遠方派の4人組はすべて  
の〇年安保の旧共産主義者同盟のメンバーだった。市民や国家をまき  
こんで大きなダイナミズムを経験したものは、それを超える大きな運  
動や組織の形成を目指しても、小さく固まることに収斂しようとはし  
ない。しかし、分派らしきものは必然的に発生する。

分派闘争というものは、政治運動においても宗教運動においても、  
その存在に必然的な存在理由がある以上、長期にわたつて戦われるも  
のであるが、共産主義者同盟の場合は、そのような分派闘争というよ  
りも組織の解体過程にあらわれた一時的な分派現象に過ぎなかつた。  
一年ももたないで全部がなくなるといふようなものは、分派闘争とい  
えるものではない。セクトというものは、本来もつと強固なものであ  
り、一時的な泡沫現象とはわけがちがうのがセクトである。共産主義  
者同盟に分派闘争など事実上なかつたと言わなければならぬ。セク  
トというものは確固とした理論とともに強力な人格がなければ成立も  
存続もできないのは自明のことだ。したがつて分派らしきものが形成  
されても、その生命力や行く末を見通すことは容易いことであるから、  
政治がわかるものはそんなにいれこまない。

石井や遠方派はレーニン病患者たることから免れていた。その点が

彼らの特徴であり、分裂状況に対するスタンスの取り方にもそれは現  
れた。くりかえし現れる左翼主義小児病と謂われるものの実体は経済  
主義である。マルクスもレーニンも経済学や経済分析に集中的なエネ  
ルギーを注いできたわけだから、経済問題に精通して精進することが  
人を経済主義者にするわけではない。経済主義とは、経済的考察から  
直接無媒介に活動方針を抽出することであり、政治音痴の一形態であ  
るが、それは政治運動や革命運動に対する不勉強や総合的知見の欠如  
に由来するものであり、いつまでも学生の水準に留まっていることが  
原因である。運動は与えられた条件でしか遂行できないものだから、  
不可避のことだとも言えるが、特殊日本的な精神構造も濃厚だと思わ  
れる。

本書は、前半が直接に政治党派との関わりに充てられ、後半は医師  
として、また、病院経営者として、さらには医療関係の政府委員とし  
ての活動と意見に充てられているため、「日本の過激派」に関心がな  
い人々にとつても必読の内容となつている。〇年安保闘争直後から  
心身症状に煩わされてきた私は、医師としての石井にも脱感作療法に  
ついての示唆も受けたりしたが、あるとき、なんの脈絡もなく突然  
に「中から指をしっかりと挿んでくれれば、それは男の子だ」と言つて私  
を驚かせた。話の内容についてはない。東大の医学部で近代科学知  
識の枠を身に付けた人間が昔の助産婦が言いそうなことを言つたから  
だ。石井という人間はまちがいなく経験知というものについて特別な  
感性を持っている人間である。

『図書新聞』二九八号（二〇一一年一月三日）

千葉正健さんを偲ぶ会事務局